



Title: 小説ってやっぱり面白い

年末年始休館を前に、今月の15日(木)から28日(水)まで、大館市立図書館全館(おおとり号を除く)で貸出し冊数の上限を倍増します。図書・雑誌が10冊まで、紙芝居も10巻まで借りられます。貸出し期間も通常2週間から3週間になります。

お知らせがもう一つ。毎年実施している利用者アンケートを今年も行なっています。皆様のご意見を図書館運営に活かすため、ぜひご協力をお願いします。

✿飛行機と新聞

1ヶ月くらい前のことです。雲が垂れこめた夕暮れ時、飛行機のエンジン音がずいぶん大きく聞こえて空を見ると、見たこともないほど低空を旅客機が過ぎていきました。我が家は大館能代空港を発着する飛行機のルートとは反対側です。雨雲の下を飛行機が？すわ墜落か、と思いましたが、どうやら無事に飛んでいったようです。

ところで私は新聞を毎朝丹念に読む読者ではありません。まったく読まない日もよくあって、その場合は後でまとめて読みます。数日前に10月末くらいからの読んでいない新聞をまとめて読みました。そこで初めて知ったのですが、11月上旬に大館能代空港は何年か振りの国内チャーター便を迎えていたのですね。あれはその便だったんだ。新聞に旧聞に属することを教えられたなあ、と思ったことが語呂合わせになっていたので、つい書いてしまいました。

旧聞といえば現在大館市立中央図書館では、許可を得て古い北鹿新聞のPDF化に取り組んでいます。外注もできず細々とですが。戦後まもなくの新聞などは、当時の紙質の悪さもあって触ると碎けるんじゃないかというような状態です。それだけに作業が急がれます。

それはともかく、昔の新聞は面白い。記事も現在とは筆致が違って、何というか率直だし、広告欄も興味がつきません。完成の暁には菅江真澄著作集と同様、デジタル資料として利用に供したいと思っています。問題はいつになったらできるか予想もつかないところですが。

✿森絵都の新作がスゴイ

久々に小説を読み始めたらやめられなくなりました。森絵都『みかづき』(KADOKAWA、2016、中央・比内図書館所蔵)です。

塾業界を舞台にした戦後三代にわたる一族の物語で、467頁と森絵都としては『DIVE!!』に次ぐ長さ。ストーリーの中では教育界、教育行政の変遷や問題が手際よく整理され、業界内部の確執から家族のあり方まで、いろいろなことを考えさせられました。しかも森絵都だから読みやすいし面白い。

ひとつだけ引っ掛かったのは、三代目の一郎が学習支援活動に乗り出す際、元教員の志望者が残らず退席した場面です。団塊世代にも「オレがオレが」ではない元教員もたくさんいることを経験上知っているのです。

それはそうと、三代目は一郎と杏の兄妹に、ハーフのさくらの三人。杏はともかく、さくらと一郎？以後「昭和枯れすすき」のメロディが頭の中でしつこく鳴って

困りました。

❖ 「料る」を読めますか？

有川浩のエッセイ集『倒れるときは前のめり』（KADOKAWA、2016、中央・比内・田代図書館蔵）を読んでいると「料る」という言葉が。料理するという意味だろうけど、なんと読むのかしばらく考え込みました。料理関係で「る」と送る言葉は、はかる・にる・むしる・あぶる・あげる・のせる・ならべる・たべる・かたづけける……。この中では「はかる」がもっともそれらしいか、と見当をつけて、辞書にあたってみました。

まずは漢和辞典。『角川新字源』によると、料の字は斗（ます）と米からなり「はかる」の意。おお、合ってた。でも、文中の意味とは合わないように思えます。

次に国語辞典ですが、中央図書館後援会から設立20周年記念に寄贈していただいた『日本国語大辞典』第13巻（小学館、2009年第二版第六刷、中央図書館蔵）が最終兵器。料理の近辺をみていると、なんと「りょうる」の見出しがあるではありませんか。意味は「料理する」。これだ。

この辞典、出典は可能な限り初出を調べていて、料理する意での「料る」は江戸時代の1672年、名詞の「料理」は804年の『皇太神宮儀式帳』が挙げられています。料るの方はだいぶ新しいことばなんですね。

その後『広辞苑第六版』を見たら、そちらにも「料る」は見出しで載っていました。見比べると、ことばの歴史的な変遷やその年号が明記されている点が、大辞典と中辞典の違いなのでしょうね。いろいろな辞典や事典が中央図書館2階の参考図書室には揃っていますので、ぜひ活用してください。（陽）